

氏 名 : 神井 享子
専攻分野の名称 : 博士 (教育学)
学位記番号 : 博甲第 245 号
学位授与年月日 : 平成 27 年 3 月 17 日
学位授与の要件 : 学位規則第 4 条第 1 項該当 課程博士
学位論文名 : 自閉症スペクトラム障害児における心の理論と実行機能の
関連について
論文審査委員 : (主査) 教授 小池 敏英
(副査) 教授 朝倉 隆司 教授 北島 善夫
教授 細渕 富夫 教授 藤野 博

学位論文要旨

自閉症スペクトラム障害 (autism spectrum disorder:以下 ASD) 児では、その特性として対人関係やコミュニケーション面での問題が注目されており、その特性の理解や有効な支援の在り方等が教育現場において模索されている。ASD 児においては、これらの問題の背後にある要因として、心の理論 (Theory of Mind : ToM) の獲得が困難であることが指摘されてきた。近年では、心の理論の発達と実行機能の発達に関連がある可能性が示唆されている。

第一章においては、ASD 児における心の理論と実行機能の関係についての研究課題を概観し、これらを通して本研究の課題と目的について論じた。ASD を対象として心の理論と実行機能の関連を検討した先行研究は少なく、日本国内ではほとんど実施されていない。実施された先行研究においても、参加者の生活年齢の幅が広いこと、心の理論課題解決に与える実行機能の影響を詳細に検討したものはないこと、実行機能の下位要素を網羅した検討はなされていないことが課題として挙げられた。そこで、本研究においては、学齢期の ASD 児において心の理論獲得に実行機能が与える影響について詳細に検討すること、ASD 児における心の理論の発達と実行機能の発達がどのように関連しているのか考察すること、ASD における他者の心的状態の理解にどのような支援策が考えられるのか検討することを目的とした。

第二章においては、ASD における心の理論と実行機能の関連について、実行機能を構成する各下位要素との関連を詳細に検討した。

第一節においては、抑制及びプランニングの能力が心の理論課題解決に与える影響について検討した。その結果、ASD においてはプランニングの能力が心の理論課題解決に影響を与えていることが明らかとなったが、課題の難度が児童の実態に適しておらず、天井効果が生じ十分な検討ができないという問題点が残った。

そこで、第二章第二節においては、課題の難度を調整し、抑制及びプランニングの能力が心の理論課題解決に与える影響について検討した。その結果、ASD では、抑制の能力は心の理論課題解決に影響を与えておらず、プランニングの能力のみが心の理論課題解決に影響しているという結果が得られた。

第二章第三節においては、プランニング及びシフティングの能力が心の理論課題解決に与える影響について検討した。その結果、シフティングの能力は心の理論課題解決に影響を与えておらず、プランニングの能力のみが影響を与えているという結果が得られた。

第二章第四節においては、プランニング及びワーキングメモリの能力が心の理論課題解決に与える影響について検討した。その結果、ワーキングメモリの能力は心の理論課題解決に影響を与えておらず、プランニングの能力のみが影響を与えているという結果が得られた。第二章全体を通して、ASD 児の心の理論課題解決に当たっては、プランニングのみが影響を与えているという結果が得られた。また、プランニングと心の理論の関連は定型発達幼児においては見られないものであり、ASD 児では定型発達児と異なる方略を用いて心の理論課題を解決している可能性が示された。

第三章においては、ASD の程度と心の理論やプランニングとの関連や、プランニングが心の理論課題解決に与える影響のメカニズムについて検討することを目的とした。

第一節においては、ASD の程度を評定する質問紙である PARS (Pervasive Developmental Disorders Autism Society Japan Rating Scale : 広汎性発達障害日本自閉症協会評定尺度) と、心の理論、プランニングの関連について検討した。その結果、ASD の程度が強い児童ほど、プランニング能力を活用した代替的な方略によって心の理論課題を解決していることが明らかとなった。

第二節においては、プランニングが心の理論課題解決に与える影響について検討した。その結果、プランニング課題であるハノイの塔課題の成績から心の理論課題の通過・非通過を予測できること、心の理論課題の難度の差は、ハノイの塔課題で必要とされるような再帰的な構造の複雑さによって説明可能であることが示された。

第四章においては、これらの結果を総合的に考察し、今後の展望について述べた。本研究の結果から、ASD 児における他者の心的状態の理解を支援する上で、経験を重ねることによる自然な理解を期待するのではなく、当該の状況を視覚的に表現したり、再帰構造の把握を促すために埋め込まれた状況の理解を促進したりすることが有効であると考えられた。また、構造化された課題場面で ASD 児がどのような手掛かりを用いて課題を解決しているのか明らかにすること、再帰性の理解と言語の関連を検討することが今後の課題として挙げられた。